
馬鹿には馬鹿なりの馬鹿な大冒険がある

お馬鹿さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

馬鹿には馬鹿なりの馬鹿な大冒険がある

【Nコード】

N6355Z

【作者名】

お馬鹿さん

【あらすじ】

馬鹿を馬鹿にしてはいけない。馬鹿には馬鹿なりの馬鹿な考えによる馬鹿な行動があり、結果的に馬鹿な展開になってしまうだけなのだから。

馬鹿な理由から異世界に召還された馬鹿、轟隼人は次々に馬鹿な事件へと巻き込まれるような、巻き込むような、むしろ引つ掻き回していく。

馬鹿な作者がお送りする、馬鹿の馬鹿による常人の為の馬鹿ストーリー

リーが今ここに始まる！

作者は馬鹿な為先の展開を考えていません。

第一話 「馬鹿、降臨す」

諸君は馬鹿という生き物をご存じだろうか。

もちろん馬や鹿ではなく、この場合は人間族の中でも取り分け意味の分からない人種のことだ。

彼らは決して合理的な行動はせず、その個々によって異なる思考回路を持つ。それを理解したり再現することは非常に困難で、十把一絡げに全て同じ馬鹿という種類では考えられない。

だが、世間の人々は考えることを放棄し単なる「馬鹿」と切り捨ててきた、彼らについて真面目に考えることは無意味と知っていたからである。

とは言つものの、待つて欲しい。

彼らは普段何をしているのか？ 彼らが我々の想像もつかない事態に巻き込まれたとき、一体どうするのか？

果たしてあなたは知っているだろうか？

馬鹿には、馬鹿なりの、馬鹿な大冒険があるのである。

*

ここではない、遠い世界を想像していただこうか。

そこは地球と同じ人間が住んでいる惑星で、文明は現代ほど栄えてはいない。まだ自分達が住んでいる星の形も知らない段階だ。

名前も付けられていないその惑星には大きな海と、いくつかの大陸があった。

それらの陸地の中でも一際大きなものでは、独自の文化を持った人間達が国を構え、それぞれ生活していた。

今回舞台となるのは、その中のある王国だ。

諸君らにはさらに、王城の地下室をイメージしていただくことになる。薄暗く石造りの地下室では、秘密の儀式が行われていた。

禍々しい魔方陣の周りにフードで顔を隠した怪しげな人物が数人、何やら呪文を唱えながら祈りを捧げている。

地下室には彼らとは別に二人の人間がいた。この国王と、大臣である。見張りの兵士も何人が居たが、ここでは割愛させていただく。

物語は王と大臣の会話から始まるからである。

「陛下、本当によろしいのですかな？」

綺麗に禿げ上がった頭を持つ大臣が、おずおずと王に問う。

「無論だ、余が自ら決断したこと。今さら是非もない」

問われた王が答えた。低くしわがれた、だが明確な意志を持った声だ。

王は年老いていたが、その二つの眼差しだけは衰えることなく、爛々と輝いていた。

「しかし、異世界から勇者を召喚するなど……まるでおとぎ話のようです、私には未だ信じられません」

不遜は承知の上で、大臣が言う。

この国は今危機に瀕していた。ここでは一般的に、魔物と呼ばれる怪異が出現するからだ。諸君らは様々な化け物のイメージを思い浮かべただろうが、それで相違無いはずだ。

魔物はかつては統制されることの無く好き勝手に生きていたが、百年程前に魔物は一個の集団として人間を襲い始めた。

国民はみな「魔王が現れたのだ」と恐れおののき、王に救いを求めた。当時の王は兵隊を派遣し魔物の巣を探して回ったが、魔王の存在は認められず、日に日に人間達は消耗していった。

居場所が分からないのに大規模な派兵は行えず、やがてこの国では自国を守り、小規模な調査隊を派遣することしかなくなった。

だが今の国王は違った。自らの力でこの状況を打破しようと試みたのである。とはいえ思い付くことは過去の王と相違なく、王は広く知恵を募ることにした。

そこで集まった考えのひとつに、魔術を用いて救ってくれる存在を召喚するといったものがあつたのだ。

「前例はあるようだ、この文献には異世界より出でし人物が知恵を授けたと」

「陛下、その文献からして私には信じられないのでございます」

「物は試しというではないか、他に方法もあるまい？」

「左様ですが……」

煮えきらない様子的大臣に、どこか面白がっているようにも見える王。彼らは対照的な性格であるが故にうまくいっていた。

と、その時。地下室に刻まれた魔方陣が妖しく光だしたではないか。人々は感嘆の声をあげた。

「見る大臣！　きつと勇者が出てくるぞ！」

王は嬉々として魔方陣に駆け寄り、その動向を見守った。ピリピリと空気を震わせ、魔方陣がいつそう激しく光を放つ。

「陛下！　お離れください！　危険です！」

「何を言うか！　このような奇跡……！　余が最初に見届けんできど
うする！」

王の眼差しはもはや少年時代のそれであった。こうなってしまうては王は止められぬと大臣は覚悟し、せめてもの安全を祈りながら部屋
の角へと後ずさっていく。

そして、放たれた閃光が部屋中を満たした、その瞬間。

魔方陣の中心から、一人の人間が歩み出た。

そして、

「話は聞かせてもらったよ……！　この俺が世界を救ってみせる！」

涙を流しながら、王に抱きついた。

この日、世界に一人の馬鹿が降臨した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6355z/>

馬鹿には馬鹿なりの馬鹿な大冒険がある

2011年12月21日09時47分発行